

荒神宮の絵馬と竹内八十吉の作品群

諏訪形自治会、諏訪形誌活用委員会共催のイベントにご参加いただき、ありがとうございます。今回は荒神宮に奉納された絵馬を中心に見ていきたいと思います。併せて、荒神宮の建築に見られる竹内八十吉の作品についても見学していただきます。

今回の講師は諏訪形誌活用委員会委員窪田善雄さんです。本資料は窪田善雄さんのお書きになった資料を中心に、『諏訪形誌Web版』に公開されているものを中心に再構成しました。

1 荒神宮に奉納された絵馬

江戸時代から明治時代にかけて、荒神宮は大きな賑わいを見せます。「荒神講」も盛んに行われた記録があります。またこの時期、前述のとおり多数の絵馬が荒神宮に奉納されています。絵馬を奉納した願主は近隣の人々のみならず、関東方面や越後（新潟県）、大阪などとたいへん広範囲にわたっており、荒神宮信仰の広がりがわかります。

古老の話では「荒神宮本殿の壁面には数え切れないくらいの絵馬が飾られていたが、本殿を修理する時（昭和27（1952）年か

ら28（1953）年にかけての修理か？）にかなり荒っぽい作業が行われてしまい、残念ながらそれらの多くが失われてしまった」とのことです。今井武雄さんの『荒神宮の由来』には

「絵馬は数百枚」という記述があります。現在も本殿壁には損傷が激しい絵馬が何枚か残されています（左写真参照）。比較的状态の良い絵馬は現在、拝殿の壁などに飾られていますが、他の場所にも保管されている可能性があり、今後の調査が期待されます。



荒神宮全景

（『信濃国上田全図』

明治24年（1891）より）

以下に紹介する絵馬の調査は主に、諏訪形誌活用委員会委員（元諏訪形誌編集委員会副委員長）窪田善雄さんによります。

○「北前船 祥風丸」（文政12年：1829）

願主 越後糸魚川 寺崎伴右衛門



○「北前船 三隻」（元治2年：1865）

願主 越後糸魚川 寺崎伴右衛門



○「海上安全」（元治2年：1865 7月）
願主 越後糸魚川 寺崎伴右衛門 政孝



「北前船（千石船）」がかなり写実的に描かれた3枚の絵馬は、越後国（現在の新潟県）糸魚川の船主、寺崎伴右衛門という人が航海の安全を願って寄進したものです。

左の「北前船 祥風丸」の絵馬には「吉本善応」の名前が見られます。窪田善雄さんの調査によると、この人は大坂（大阪）の絵師として知られる人です。北前船の航路は、北海道、東北から新潟を経て関門海峡を通り、大坂（大阪）に至るものです。主に日本海沿岸から米穀を浪速（大阪）に回漕し、帰り荷として瀬戸内海の塩を運びましたが、その一部が信州にももたらされています。このようなことから、これらの絵馬は糸魚川の北前船主寺崎伴右衛門が大坂の絵師に依頼して描い

たものを荒神宮に奉納した、と考えることができます。なお、北前船が活躍したのは江戸時代中期（18世紀半ば）から明治30（1897）年ごろまでです。

海から遠く離れたこの地の神社にこのような絵馬が奉納されているのかは不思議に思います。民間信仰の上では「荒神」は一切の不浄を清める火の神、竈の神とされています。それがこの、北前船の航行安全とどのようにつながっているのかは定かではありません。ただ、荒神信仰は瀬戸内海沿岸で盛んなことから、海の安全ともつながりがあるのかもしれない。

やや時代は下りますが、右の絵馬「一文銭三重塔」も1894（明治27）年に大坂府河内国石川國富田林村（現在の大阪市富田林市）の住人、武田重太郎から寄進されたものです。これも北前船によってもたらされたもののなのかも知れません。



○「文書く女」（安政5年：1858）
願主 信州高遠藩 山下虎五郎 無賢母



○「九尾の狐と妲己の夢を見る男」（年代不詳）
願主 高井郡高井野村堀之内組 藤澤前太夫



左の「文書く女」または「歌仙」は現在の伊那市高遠町の人から寄進された絵馬です。和歌の上達を祈念して奉納されたものでしょうか。この女性がだれなのかわかりませんが、六歌仙のひとり、小野小町ではないか、とも言われています。右の「九尾の狐と妲己の夢を見る男」は現在の上高井郡高山村の人から寄進された絵馬です。

○「壇ノ浦合戦 源義経 八艘飛び」(安政4年:1857) 願主 武州 豊島郡関村 子 講中



次に紹介する2枚の絵馬同様、武州豊島郡関村、現在の東京都練馬区関町の住人から奉納されたものと考えられます。

○「15名(男9人女6人)の参拝団体」 武州豊島郡関村 安政3巳年 3月 吉日
参詣者は 健蔵 八十吉 伝次郎 そめ 関五郎 さの たま かね せと 栄蔵
源太郎 熊吉 多五郎 みゑ 吉五郎



「武州豊島郡関村」は現在の東京都豊島区に隣接する練馬区関町のことと考えられます。「安政四巳年」は1857年で、前述のとおり荒神宮は文化8(1811)年の火災で焼失しており、安政2(1855)年2月から竹内八十吉らによって再建工事が始まり、竣工したのは文久3(1863)年なので、この人たちが参拝した当時は、堂宇は再建途上だったはずです。江戸の絵師による想像上の「荒神宮の図」ということになります。

この時参拝した人たちの中の何人かが再び荒神宮に参拝しているようです。下の絵馬にはかね(可祢女)と嘉五郎(吉五郎)の名前が見られます。



○「三寶大荒神」文久3年癸亥年 武州豊嶋郡関村
願主 多(多)加女 可祢女 吉五郎

文久3年は荒神宮が再建された年ですから、(代参でなければ)この人たちは荒神宮の新しい堂宇に参ったということになります。2枚の絵馬を比べると、描かれた荒神宮の堂宇はよく似ていることがわかります。また、2枚目には後背に海のような景色が描かれ、帆掛け船なども見られます。この絵を描いた人が「荒神宮は(千曲川という)大河のほとりにある」ということを知っていて、想像で描いた、ということなのかも知れません。



○奉納 東京府神田●錦町1丁目
岡村茂太郎 同里 永井金太郎 同●
岡村●● 同竹二郎
明治参拾四年七月二拾●日

「東京府神田●錦町」は、現在の東京都千代田区神田錦町です。

○「御幣雲と松」(明治35年:1902)
表 願主 登?松楼 前● 俳句 二句
裏 願主 坂城町出店 上田町遊郭 荒井八五郎

○明治36年9月吉日
願主 卯ノ年 男 丑ノ年女



○明治参拾四年拾月●●吉日
三重県阪南郡浦野村仁柿(?)
森下尚吉納
保管料●●円也

鏡を貼った絵馬

古来から鏡は、神や精霊などの超自然的力や神秘的な力にはたらきかけ、種々の願望をかなえようとする呪術性があるものとされているため、「絵馬」に用いられることも理解できるものと思います。愛知県の鳳来寺では、ご本尊の薬師如来に祈願する時に鏡を奉納する「鏡絵馬」の習わしがある、とのこと。



○奉納
明治廿二年十一月十日
願主午年高木庄治郎



○奉納
明治二十年
越中國射水郡 出木田村 西岡健太郎
(裏面)
明治二十年四月二十日献上
※注:「献」は旧字体
※注:旧射水郡に出木田村の名称は見あたらない

参考文献:『郷土の絵馬(1975年上田市博物館刊)』

2 竹内八十吉

文化8年(1811)、諏訪形に大火があり、当時の諏訪形中心部(現在の公民館北東のエリア)にあたるかなりの地域が焼失してしまいました。この火災では荒神宮も全焼してしまいました。

今井武雄さん(現在の当主今井貴美さんの祖父)が著した『荒神宮別当今井家系略記』によると、火災の後、安政2年(1855)2月に、竹内八十吉の設計施工によって新しい荒神宮の造営に着手した、とあります。また、八十吉の請負証書や棟札の墨書からは、安政4年(1857)に請け負って文久3年(1863)に棟上げがされた、とあります。『諏訪形誌』の記述では、「明治維新も目の前の文久3年(1863)3月に荒神宮竣工遷座祭が行われた」と記録されています。

新しい荒神宮の造営に関わった竹内八十吉は優れた彫刻家、建築家として知られている人で、上田近辺にも多くの作品を残した人です。八十吉の生涯は不明な点も多いのですが、文化12(1815)年に現在の上田市国分上澤で生まれ、11歳の時に地元で中澤本次郎について彫刻を習ったという記録があります。一時、葛飾北斎の門に入って絵画を学んだともされています。また、江戸、京都に出て修行、江戸浅草茅町の某師匠(氏名不詳)について彫刻を修行し、深川の八幡社で獅子の彫刻を作ったとも伝えられています。

八十吉は上田地域のあちこちに多くの彫刻作品を残していますが、特に太郎山神社や荒神宮の作品が優れたものとして評価されています。以下、上田地域で見ることのできる八十吉の作品を挙げます。

- ・信濃国分寺薬師堂の彫刻(天保11(1860)年)
- ・良泉寺(上田市殿城矢沢)の梅一木造りの椅子
- ・金昌寺太子堂(上田市中央)
- ・荒神宮(上田市諏訪形)
- ・白山比咩神社の隨身(上田市山口)
- ・科野大宮社・子安社(上田市常田)
- ・太郎山神社(太郎山 明治6)
- ・伊波保神社(上田市岩下)の「鯉に乗る琴高仙人」「鶴に乗る丁令威仙人」の脇障子彫刻

- 堀川神社（上田市下堀）の「黄石公と張良」、「韓信股くぐり」の胴羽目
- 龍洞院開山堂（上田市蒼久保）の龍、鶴の彫物
- 願行堂天神社（上田市中心2丁目（大門町））

八十吉の名は、明治24（1891）年に行われた「科野大神宮奉遷式」の参加者名簿の中にも「御火二人」のひとりとして記載されています。八十吉は、明治31（1898）年9月8日に亡くなっています。享年83歳。当時としては長命だったと言えるでしょう。

（1）荒神宮本殿（上田市指定）

前述のとおり、竹内八十吉による建物です。荒神宮本殿は、すべてに檜材が用いられています。三間社流造、唐破風、屋根はこけら葺きで三方に縁をつけ、東西には脇障子が設けられています。軒先の中心には鳳凰の大きな彫刻を配し、四本の柱の上部の貫には獅子、龍、象などの彫刻が施されています。これらの彫刻は華麗で、動きを感じさせる堂々としたものとなっています。また、薄い板で作られた、東西の脇障子や壁面などには、中国の古い史書にある物語などを元にした彫刻が所狭しと並んでいて、それらの精緻な技法には圧倒されます。荒神宮本殿は昭和43（1968）年、上田市指定の文化財となっています。

参考文献『上田市誌・明日をひらいた上田の人びと』



（2）竹内八十吉の手による荒神宮本殿の装飾彫刻

荒神宮本殿は、正面の大きな拝殿の左を通って奥に進むと見えてきます。

ここでまず紹介したいのは、この本殿にびっしりと群がる装飾彫刻のものすごさです。建築を支えるという本来の機能を無視して柱をスタスタになるまで彫り込む情熱には圧倒されます。



少々マニアックな話になりますが、エウヘニオ・ドールスというスペインの美術史学者が、「人間には、調和のとれた理性的で完璧な美しさに憧れる一方で、おどろおどろしいもの、ゴテゴテしたもの、激情的なもの、ソツとするものなどを本能的に志向する傾向があり、これが時代を超えてしばしば美術の様式として出現する」と述べました。そして、その典型例である十七～十八世紀ヨーロッパのバロック芸術にあやかり、これらすべてを一括して「バロック」と名付けたのです。日光東照宮などに出現するゴチャゴチャ・ゴテゴテした過剰装飾傾向もその典型と思われ、「江戸バロック」と呼んでもいいのではと私は思っています。そして、諏訪形の荒神宮本殿もその典型といえるのではないのでしょうか。

さて、本殿に群がる彫刻の中で、特に圧巻なのが、東西の側面を飾る群像彫刻です。それぞれ中国古代の伝説を題材にしています。

西側彫刻は、周の武王が殷の暴君紂王を倒した戦いの説話で、武王が殷の武将に槍で襲われたとき、どこからともなく金龍が現れて武王を護ったという伝説が描かれています。龍が描かれているのは、木造建築を火災から守ることを象徴しているとも考えられます。

東側の彫刻は、春秋戦国時代の説話で、豫讓（よじょう ?～ 紀元前453年頃）という男が主君の仇である趙無恤（趙襄子）を討とうと橋で待伏せするも失敗、せめてものけじめにと、豫讓の気概に感じ入った趙無恤の着ていた服をもらい受け、それを3度切りつけたあと自害した、という漢代の史書『史記』記載の伝承に題材を取っています。横山光輝の漫画『史記』でも「義に殉ずる」として取り上げられている逸話です。

これらの題材はもちろん、竹内八十吉オリジナルではありません。当時の神社彫刻でよく採用されるテーマでした。おそらく、それらが水回りに関係するものだからです。龍は、雨を呼び、橋は水辺の付属物です。当時、建築にとって最大のリスクは火災でした。寺社建築に水に関する装飾が多いのはそのためです。

荒神宮で見ることができる竹内八十吉の彫刻は、精緻で、しかも素晴らしい躍動感と写実性を備えており、その超絶技巧には、驚嘆すべきものがあります。この本殿が上田市指定文化財になっているのも当然といえましょう。



西側彫刻



東側彫刻

文と写真：窪田善雄さん（諏訪形誌活用委員会委員） 一部改編